OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 藤樹先生學問の骨髄 |
| Author(s) | 松山, 直藏 |
| Citation | 懐徳. 1924, 1, p. 14-19 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/88685 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

んことを希望する次第であります。

左の一篇は曩年中央公會堂に於て藤樹先生遺德顯彰會の請に應じて做しゝ講演の要旨なり。頃日、堂友の間に、藤樹先生の遺蹟を訪ひ藤樹神社を拜せんの議ありと聞く。會たま、懷德の發刊に際し、幹事余に徵するに文を以てす。因りて篋底を搜りて是の篇を得たれば、其要旨を錄して以て之が責を塞ぐ。大正十三年六月三十日。懷德堂教授松山直藏識す

## 藤樹先生學問の骨髓

今を距ること二十數年前、余が笈を負ふて、京都に學べりし時、當時刊行せられし近江聖人と云へる一小冊子を讀みき。這は些たるに一少年讀本に過ぎざりしも、余をして始めて藤樹先生の傳記を讀むの機會に接せしめしものは這書なりき。今猶ほ當時の記憶の髣髴として存するものあり。そは之を讀みて涕淚滂沱、卷を終ふることあたはざりしことなり。先生伊豫の大洲に在りて、加藤侯に仕へし時、鄉里に在る母を慕ふて之を迎へんと欲し、江洲小川村に歸省し、其の切切の情を述べて、大洲に伴ひ奉らんことを乞ひしも、母は鄉里を離るゝことを厭ひて、之を肯んぜざりしかば、先生已むことを得ず、堪へ難き別離の情を忍びて、單身大洲に還れり。翌年韓詩外傳の皐魚の傳を讀みて、樹欲靜而風不止子欲養而親不待の處に至り、感動して止まず、其の翌年遂に母を養はんがために、仕を辭し鄉に歸り、奉養の孝を盡せり。是等の事蹟を讀みて、甚く其の至誠純孝に感動し、涕泣已む能

はざりしなり。今、先生の遺徳の顕彰宣傳せらるゝに際し、遠く昔日の事を憶ひ、更に記憶の新たにせらるゝものあるを覺ゆ。

藤樹先生行狀に據るに、先生は十一歳の時、始めて四書の一なる大學を讀み、其中に自天子以至於庶人壹是皆以修身爲本といへる處に至り、感激已まず、歎じて曰く、幸に是の書の存するあり、聖人豈得て學びて至るべからざらんやと、涕涙衣を沾しきと云ふ。是れ先生立志の第一着歩なりしなり。少年時代に於ける先生の純眞なる心情が、大學の一言句によりて感發せられて、茲に聖人たらんと欲するの志を立てられしなり。又年十二歳の時に、或る日食事の際、箸を投じて自ら責めて曰く、此れ誰の賜ぞや一、に父母、二に祖父、三に君、斯の三者の恩は須臾も忘るべからずと。此れ先生が君父の大恩を感じ、人心に固有せる報謝の誠が茲に閃發せしなり。

先生の學問の根底は、實に先生が其の德性を修めて、聖人たらんと欲するの志を立てられしことと、恩を感じ本に報いんとする報謝の誠の閃とに在りて存す。凡そ物には根底なかるべからず。夫の天を摩する喬木を見よ。地下に蟠屈せる根底あるに非ずや。藤樹先生が近江聖人と呼ばれ、後世道德の宗師と仰がるゝ所以のものは、一に先生の純粹なる道義的精神と眞實なる道德的精操とが、其の學問の根底を成しゝに由る。先生は又深く孝經を尊信し毎朝之を拜誦せられたりと云ふ。されば先生の學問は道德的理想たる聖人に對する憧憬の心と、恩を感じ本に報ゆる報謝の念とを根底として、之が上に孝經大學の二書を以て之が規模を定めしものなり。

今藤樹先生の遺書遺文を通讀して先生の學問を窺ひ見るに、先生學問の骨髓たるものは大學の三綱領中の明明德止至善と所謂八條目の一たる致知（致良知ト解ス）とに在り。其の明德といひ、至善といひ、良知といふもの此れ實に先生學問の骨髓なり。然らば其の明德とは何か。至善とは良知とは何か。明德とは人の本心にして、先天的に固有し、萬物に靈長たる所以のものなり。其の作用たる光明靈妙にして、如何なる事物も燭らさゞるなし。故に之を明德といふ。又良知とは孟子が人の慮らずして知るところのもの之を良知と曰ふと定義を下し、人の學ばずして能くする、之を良能と曰ふと幷べ說けり。要するに道德的本能に外ならず。先生の其門人中西某を送りし文の中に

孝經所謂愛親敬親者孟子所謂良知良能明德之本眞也（送中西子）

と云ひ又山田某を送りし文の中に

蓋至善者良知之別號（送山田子）

と云へり。されば、父母を愛敬するの誠は即ち明德にして、良知良能も至善も亦之に外ならざるなり。この父母を愛敬するの誠は極めて純粹眞實なる至情にして、無私無欲物我一體の仁に歸するものなり。先生はこの明德良知至善の本體を孝と名け、孝は天地未畫の前に在る太虛の神道なりと云へり。されば、先生の所謂孝は、普通世に稱する狹義の孝に非ずして、極めて廣義なる哲學的なる本體論的なる又極めて神秘的なるものなり。凡そ道德を修め實行を力むるにも、惟だ日常の言行を謹み、之を修むるのみにては、單に曲謹なる所謂鄕愿の徒となるに過ぎずして、かの玲瓏透徹一貫の妙を具ふる聖人君子たるあたはず。必や道德の大本大原を知ること明かに、之を信ずること篤くして、始めて此こに達するを得べきなり。孔夫子は庸德を行ひ庸言を謹むを以て君子の道と說かれしも、決して之に止まるとせられしに非ず、天を信じ天命を畏れ、其道は一以て之を貫くものありしなり。藤樹先生も亦孝と云へる本體を覺知して、之を信ぜられしなり。是の本體は天地萬物の由りて生ずる本源にして、又明德良知至善の本體なり。又所謂上帝所謂神なり。又孔夫子の所謂天、周子の所謂太極、程子の所謂理、張子の所謂太虛なり。先生は純粹眞實なる愛敬の誠の閃を發見して、其本體を把握せられしものなりと思惟す。即ち明德至善良知を覺知して、之を把握せられしなり。されば先生が門人等に與へて、所謂太虛の神道を說き、心を修むる心法を示し、または修養の工夫を敎へらるゝところを見るに、皆この愛敬の誠を發見して、之を心の主となし、之を放失せしめざるに歸せざるはなし。

其の神道大義に

愛敬の德は天地同根萬物一體也。人欲淸く盡て天理流行す。空々如たり。其大外なく、其小內なし。天地萬物皆心中に在り。我に不在と云ふ事なし。故我なし。無欲にして靜なり。云々

と云ひ、岡村某に答ふるの書に

先見在の心欲に動かず、物に滯らず。温和慈愛底恭敬惺々底の所を御見立候て、此心を信仰して、常々不失様に可被成候。云々（答岡村子書）

と云ひ又森村某に答ふるの書にも

現在の心欲に不レ動、物に不レ滯時、愛敬底なる心を主人と御定、常に不失様に成さるべく候。（答森村子書）

とあり。其他同様の言の遺文中に見ふるもの二三に止まらざるなり。

この愛敬の誠たるや、孔夫子の仁、曾子の孝、子思子の誠、孟子の仁義に外ならざるなり。

思ふに孔曾思孟の四子を始とし、藤樹先生に至るまで、皆愛敬の誠を道徳の本源とせられしは、其方法倶に主観的直観的に出づ。然るに西洋に在りて、獨逸近代の哲學大家ヴントは客観的經驗的實證的方法に依りて、道徳の進化を研究し、畏敬と愛好とを以て歸納的に道徳の二大原動力なりと結論せり。一は主観的に綜合的に、一は客観的に分析的に愛敬を以て道徳の本源と見ること古今東西の哲人及哲學者が反對の研究法に依りて、同一の結論同一の歸著點に到達せしことは、頗る興味あることなり。東洋道徳殊に儒教道徳に於て、孝即ち父母に對する愛敬の至情を以て道徳の本源とし、之を重んじ説くことは、實に萬世不易の大道理を看破して道説せられたる至教なりと信ず。之を要するに、藤樹先生の學問の骨髄は自己の心を内省直観して、道徳の本源たる本體を發見し、之を把握したるものにして、或は之を明徳と曰ひ、或は良知と曰ひ、或は至善と曰ひ、或は孝と曰へるなり。この本體たるや、聖人凡人の差別なく、又善人悪人の差別なく、何人も皆固有せる天賦のものなり。而して其の閃は先づ己に最近き父母に對する愛敬の至情に發見せらるゝものなり。この愛敬の誠を發見し、之を把握して失はざる、此れ先生學問の骨髄にして、又吾人道徳を修養するものゝ力を用ふべき關鍵なり。余は是の點に於て藤樹先生が善く儒教の骨髄を把握せられたるものなりと信ず。又先生の致良知を説かるゝところ、孝即ち愛敬の誠を離れては其の骨髄を失ふものなりと信ず。大鹽中齋も這箇の消息を語りて

然遺レ孝以語二良知一者。決非二王子之旨一也。（藤樹先生致良知三大字眞蹟）

と曰へり。近時孝道を重んずること遠く古に及ばず。たとひ孝道を重んずるも、その骨髓たる愛敬の誠を盡す上に於て力を用ふるもの少きは慨嘆すべきことなり。是の點に於て、今日藤樹先生の學問の骨髓を玩味することの最も適切なるを覺ゆ。

古人曰へらく、道德に志すものは功名其心を累すに足らず、功名に志すものは富貴其心を累すに足らず、富貴に志すのみならば至らざるところなからんと。實にや、藤樹先生が本邦儒者の間に巍然として其群を拔き、獨り近江聖人の名を擅まゝにする所以のものは、其の道德に志して、功名富貴の其の心を累はすなかりしに由る。先生の歌に

とても名を願ふとならば久堅の
雲にほまれのあるよしもがな

とあり。以て先生の志の存せしところを知るべきなり。近時一般人心の傾向、物質的欲求を偏重するに流れ、古來東洋に於て重んぜられたる精神的道德的欲求は藐視して顧みられざらんとす。是時に當り先生の如き生涯を學問道德に捧げたる偉人の遺德を景仰し、之を宣揚することは、實に大なる意味あり且つ有益適切なる事にして、世道人心の上に尠からざる好感化を與ふることゝ固く信ずるものなり。

江木前文部大臣曩に阪地學校巡視の途次、懷德堂記念會理事の請を納れ、特に本堂に來られ、本會の宗旨並に事業の現狀につきての其の概略を聽取し、甚く推賛の意を表せられしが、歸京の後又寄するに辜鴻銘氏の支那文明の復興と日本と題する左の一篇を以てせらる。其の望を本會に囑せらるゝの誠意感謝するに餘あり。今懷德の發刊せらるゝに當り、載せて以て堂友諸君の熟讀を乞ふと共に、益々東

亞文明の精髓を發揮宣揚するに努力せんことを期すと云爾。大正十三年六月十六日。懷德堂教授松山直藏識す

# 支那文明の復興と日本

辜鴻銘

本篇は漢洋學に通じ、世界各國人に名を馳せた辜鴻銘氏の著で京滬各外字紙に寄書せられたるもので、佐原篤介氏が譯して弊社に寄せられたものである。本篇の題目は「日本の將來」であつたけれども、支那文明の復興は日本の天職であり、日本は泰西文明の利器を採用するも精神上に於て泰西化してはならぬとの意味を示すべく、敢へて斯く改題したのである。（大正九年五月『上海』所載）

## 一

エー、エー、フルード氏は其の基督教の哲學と題する論文中に於て次のやうに言つてゐる。

或るあたゝかき夏の朝、其の繁れる葉のかげに、面はづかしげに、かくれたる、にはばら（モッス、ローズ）の一の不圖、其の根のかたをうち見やりたるに、おのれのそだちたる、そのもとのつちくれ、眼に入れり、之れをめて、如何にも穢はしき、つちくれなるよ、われこそは、花と云ふ、花のうちの最も美しきものなるに、如何なばかゝる厭はしきうちに、つながりあるなりや、と嘆じける、かくて、此のにはばらの蕾は、大空におのれのもてをいだしたるに、道行ける最初の人の手につまれて、花たば（ノーズゲイ）のまなかに逃がれて、誇りに覺へたりしに、その勝ち誇れるすがたも、まことに短かきつかの間にして久しからず、うちしなびて、かれてにけり』